

## 第二節 人種概念の起源をめぐる大論争とその陷穽

人種にもとづく差別は、人間が普遍的に抱える性さがなのか、近代の産物なのか。人種概念の起源をめぐる長年続いている大論争がある。ひとつは、人種は古代以来連続的に世界諸地域に存在してきた普遍的な概念である、と考えるものであり、もうひとつは、植民地主義や資本主義経済によって創出された、近代西洋を起源にもつ概念である、と論じるもので、現在の人種理論の主流を占めている。この近代西洋起源説の「西洋」とは、主としてヨーロッパ（とくに西欧）と北米を指す。社会的構築主義が人種研究において定着して以来、この論争は表面的には後者が圧倒的に優位に立ち、ほぼ結着したものととして済まされてきた。他方、内実としては、前者のような皮膚の色などの身体的差異をめぐる本質主義的な見方が研究者間でも根強く、またわれわれの日常生活をリアルに取り囲んでもいる。人種に関する膨大な研究のなかで、本論の議論が多少ともオリジナルな視点をもつとすれば、それはこれらの二大学説のいずれとも異なる見解を示すことにあるだろう。本節では、二大学説を簡単に紹介し、それらの限界とそれに関する人種概念の課題を抽出してみたい。<sup>12)</sup>

### 普遍説

人種概念普遍説に立つ研究において、ほぼ必ずといってよいほど引用される事例がある。古代エジプトの王墓の壁に描かれた人物画の色分けである。紀元前一三五〇年頃に遡るこれらの王墓の壁画に表された人物は、白、黄、黒、

赤の四色で塗り分けられており、それが研究者らの熱い関心を集めてきた。四つの色とはすなわち、白Ⅱ北方Ⅱヨーロッパ人、黄Ⅱ東方Ⅱアジア人、黒Ⅱ南方Ⅱサハラ砂漠以南のアフリカ人、赤Ⅱ自己Ⅱエチオピア人であり、それぞれの皮膚の色を表すとされる。これが、普遍論者らによって人種認識や人種主義の古代以来の連続性、すなわち普遍性を示すひとつの証としてみなされてきた。<sup>21)</sup>

その代表的存在のひとり、T・ゴセットにとって普遍説の裏づけは、エジプトの壁画の色分けや、五〇〇〇年前のインドに存在したといわれる、暗色の肌に対するアリア人のあいだでの嫌悪意識、紀元前三世紀の中国の著述にみられる「黄色い髪に青い目をした野蛮人」を「サルに酷似している」などと呼んだヨーロッパ人とサルのアナロジイ等々、世界諸地域に観察される。

『中国における人種言説』を著したF・ディケターの問題意識は明確である。「一般に人種偏見は『白人』だけの現象である〔……〕と想定されている」が、それは一部には「ポスト植民地主義の西洋世界における罪悪感やヨーロッパ中心主義からくるもので、非西洋社会の人種問題に対するわれわれの理解を歪めてきた」(Diketter 1992: vii)。その研究は、近代に焦点をおきながらも、古代から現代にいたるまでの中国における他者認識のありよう、蔑称、カテゴリー化などを含めた言説を時代別に吟味したものである。

ゴセットとディケターに共通するのは、身体的差異の認識やそれに対する蔑視自体が人種主義をもたらず根源的要素であるとする前提である。それゆえに人種主義と、差異の認識・偏見とが混同されている。むしろこれは、何をもちて人種主義と定義するかという根本的な問題にかかわるものである。前節で人種主義と偏見を概念的に区別する立場を示したように、他者の皮膚の色の違いを認識し、それを異なる色で表象したり、身体的差異について嫌悪感に満ちた記述を残したとしても、それ自体は、皮膚の色の文化的な知覚であり、あるいはスメドリー論文も指摘するようにエスノセントリズムであって、それ以上の意味をもつわけではない。管見のかぎりでは、古代において、言語や宗教、慣習などにとづく差異と比較したうえで、皮膚の色にとりわけ重要な意味が普遍的に与えられていたという根拠はない。これまで数多くの研究が指摘してきたように、また前節において人種概念の特性に挙げたように、身体

的差異自体が人種差別を引き起こすわけではない。

普遍説に関連して重要な位置を占めるのが、皮膚の色をめぐる本質主義的な議論である。それにはふたつの相互に関連したアプローチがある。ひとつは皮膚の色に関する価値観を検証すること、もうひとつは皮膚の色の他者認識における重要度を注視することである。前者は、白い皮膚に肯定的、黒い皮膚に否定的価値が付与されるのは普遍的である、と主張する。一九六七年アメリカの学術雑誌『デダラス』に特集号として編まれた「色と人種」は、このテーマに関するひとつの集大成である（後にFranklin ed. 1968）。そのなかでこの問題に真正面から取り組んだJ・ゲルゲンは、「白」と「黒」というそれぞれの皮膚の色に付与された対極的な価値観の源泉について、次のように述べている。夜は暗闇で子どもが親と離れて恐怖心を抱く時であり、昼は日が射し家族に包まれ安心する時であるから、「ほぼ普遍的な経験によつて、幼い頃に黒と白に対する感情が確立される可能性が高い」と（Geigen 1968: 120、強調引用者、他にDegler 1971など）。

皮膚の色をめぐる第二の本質主義的な見解は、皮膚の色が他者認識の指標として普遍的に重要な役割を果たすとみなすものである（eg. Isaacs 1968; Shils 1968; Melady 1966; Thompson 1976）。その代表格であるH・アイザックスは、「アジア諸地域の例も挙げながら、「皮膚の色と身体形質ほど、集団アイデンティティを可視的で永続的な徴とするものはない」と、身体形質とくに皮膚の色が、明確な集団認識の基準としての役割を果たすと論じている（Isaacs 1968: 75）。

たしかにユダヤ・キリスト教文化圏では前近代から、皮膚の色などの身体上の差異とみなされる要素が他者認識の世界観において少なからぬ役割を果たしてきたことは否めない。しかし、はたして欧米以外にもあらゆる社会で皮膚の色が重要な指標となるのか、白が善で黒が悪だと固定的に価値づけられているのか、を疑問に付す必要がある。

この点で我妻の研究（Wagatsuma 1968）は、日本社会における皮膚の色の意味あいを論じる、英語圏で知られた数少ない洞察としていまだに注目されている。彼は、南蛮絵の先行研究をもとに、次のような説を展開している。「スペイン・ポルトガル・オランダの人々に接して、昔の日本人が彼らの皮膚の白さを讃えた記録は、私たちの手元にな

い。だが、日本人がヨーロッパ人の髪と眼の色、大きな眼、背の高さ、そして毛深さには明らかに強い印象を受けていたと思われる」(我妻・米山一九六七：六五、Wagatsuma 1968: 134)。人種・民族の概念検討委員会によるアンケート結果によれば、——むろん対象集団によつて一定ではないもの——髪<sup>(13)</sup>の形状や色、体型、目の色、目以外の顔の特徴など、皮膚の色以外の要素が他者認識の指標となる事例は、豊富に存在する(詳細は、人種・民族の概念検討委員会一九九九・竹沢一九九九)。さらに最近翻訳が刊行されたM・バナール著の『黒いアテナ』(Batail 1987)でも、古代ギリシヤ人は元来黒く、一八世紀末以後の「ヨーロッパ、西洋」によつて「黒いアテナ」が「白いアテナ」へとその歴史を塗り変えられたのだと、膨大な資料をもとに論じて話題を呼んだ。チャナン論文のインドにおける色のイデオロギーの変化と通ずる議論である。

また同じ「白」でも、その色調によつて価値観が異なることは看過されがちである。チャナン論文によれば、植民地時代以前のインドでは、「白すぎる」人は不吉とみなされた。また前述のアンケート結果からも、色とそれが指示する集団について普遍的に一致した認識が存在するわけでもないことが明らかとなっている。「白人」が「赤」で形容される事例も稀ではなく、日本人や中国人が「西洋人」と同様、「白い」とみなされる事例もある。日本人が「赤」として認識される例さえ存在する。これらの報告に研究者自身のポジションが投影されている可能性は否定できないが、皮膚の色をめぐる根強い本質主義的な言説を相対化するうえで、重要な事例と位置づけることができるだろう。

以上のように普遍説にはいくつかの看過できない問題が見いだされる。普遍説が目を向けるのは、皮膚の色を中心とした可視的な身体形質をめぐる差異の認識や偏見であつて、それを超えるものではない。何よりも強調されるべきは、なぜ同時代的に人種をキーワードとして、世界諸地域の国民国家で周縁的集団が排除され、あるいは包摂されたか、またさまざまな植民地で諸集団が新たなヒエラルキーをともなつて、再配列されたか、とくに一九世紀後半から二〇世紀前半(あるいは形を変えて現在)の歴史的共進性が説明できないことである。

## 近代西洋起源説

他方、近代西洋起源説とはどのような解釈だろうか。それによれば、人種概念はあくまでも近代における西洋の啓蒙思想や国内外植民地主義、国民国家形成の産物である。この説のなかでも「近代」が具体的に指す現象や概念も微妙に異なることに注意する必要がある。

もっとも知られたアプローチのひとつは、人種概念の起源をアメリカの奴隷制による労働搾取に象徴されるような、近代資本主義に見いだすものである。古典と見なされるべき『資本主義と奴隷制』を著したE・ウィリアムズによる次の主張に代表されるだろう。「ニグロ、奴隷制の起源は、経済的なものである。人種的なものではない。それは労働者の皮膚の色ではなく、安価な労働力ということにかかわっている」(ウィリアムズ一九七八 [1962] : 二八―二九、強調引用者)。同様に、イギリスのネオ・マルクス主義社会学者J・レックスは、人種差別の根底に存在するのは資本主義植民地宗主国あるいはそれに類似した社会体系をもつ国における経済搾取であり、人種差別はヨーロッパ人のアメリカ大陸との遭遇から始まったと論ずる (Rex 1982 : レックス一九八七 [1983])。

スメドリー論文は、一七世紀後半に展開した白人／黒人関係の劇的な変化にスポットを当てている。労働者間の差異の構築を必要とする近代の資本主義経済が新天地で発展する過程において、人種概念がいかに生成されていったか、その過程をスメドリーは鮮やかに描いている。

スメドリーの主張に関して注目したいもうひとつの点は、彼女が近代西洋起源説からさらに踏みこんで、人種概念が北米起源であると断定していることである。彼女が起草者となった「アメリカ人類学会による人種に関する声明」には、「イデオロギーとしての人種概念は「アメリカから」世界の諸地域に伝播し、とくに植民地的状況下では、人々を区分し、序列階梯づけ、支配するストラテジーとなったのである」(AAA 1988 : 竹沢一九九九 : 四五〇)と明記されている。本書でも同様の見解が示されているが、このようにアメリカから人種概念が世界に流布したとする説は、L・ブレイス (Brace 2000) も含め、多くのアメリカ人研究者やヨーロッパ人研究者に共有されている。

たしかに黒人に対する偏見がアメリカから諸地域に拡散したとする見方は説得力をもつ。とくに、一九世紀後半に

人種学が隆盛をきわめた背景に、南北戦争前から奴隷制廃止後にいたるまで過熱した「ニグロ問題」や「混血問題」をめぐる社会的議論が存在したことを忘れるわけにはいかない。フランス人類学の創始者P・ブロカや彼を尊敬してやまなかったロンドン人類学会会長のJ・ハントの書き物を見れば、ヨーロッパの人種学の頂点に立っていた彼らがこうしたアメリカの社会事情に精通していたことがうかがえる。また日本で数年前に再版され話題を呼んだ『ちびくろサンボ』をはじめとして、「日本人の黒人観」(E. ラッセル 一九九二)がメディアなどの媒体をとおしてアメリカから受容されたものであることは疑いようがないだろう。しかしながら、「発祥地」から世界に拡散したという人種概念の実体は何であるうか。白人、黒人(および先住アメリカ人)の関係にもとづいて構築された概念の拡散をもって人種概念のアメリカ起源を主張するには、論理の飛躍を感じずにはいられない。

人種偏見が古代から存在すると主張する普遍説に反駁するとして大きな反響を呼んだのは、F・スノーデンの『肌の色への偏見がない頃』(Snowden 1983)などの一連の研究であった。古代ギリシャ人・ローマ人が、エチオピア人の皮膚の黒さに強く印象づけられながらも、それ以上にエチオピア人の軍事力や自由の精神に敬服の念を抱いていたと論じる。さらに、古代の奴隷制は特定のエスニック集団とは無関係で、実際大半を白人が占めていたという。ある書評は、「スノーデンの本の最たる貢献は、人種主義が普遍的でない、という見地からその事例を挙げていることにある」と評価している(Noel 1984、強調引用者)。

近代西洋起源説には、このほかにもいくつかのアプローチが提示されている。人種概念自体について近代西洋起源説をとるわけではないが、前述のような白/黒に対する価値観や皮膚の色を他者認識の重要な指標とするのは、植民地主義や近代化の産物にすぎない、と論じる見解などがそれである。第一の立場と類似性を示すが、経済的側面よりむしろ政治的文化的な文脈での植民地状況に力点を置く場合が多いといえよう。たとえば東南アジアにおいてヨーロッパとの接触以前から残る口承伝承を検証したF・プロスチャンは、人々は皮膚の色だけでなく言語など文化的要因によっても他者を認識していたのであり、皮膚色の違いが、言語、領土や地理的ニッチ、文化的伝統、経済活動、政治権力へのアクセスなどの差異と一致することで皮膚色が差異の指標となったにすぎないと、近代植民地主義の影

響を過大評価する主張を論駁している (Proschan 2001)。

さらに、人種概念は近代市民社会の成立の余波として現れたとする説も有力である。つまり啓蒙時代の後、権利や地位の平等が制度的に確立されたがために人種概念が重要性を獲得したと考えるのである (e.g. Malik 1996; トドロフ 2001; Goldberg 2002; Alcoff 1999)。これはムーア論文がマリーツクを引用して指摘している点である。「理性の時代」でもある啓蒙時代にはたしかに科学が発達したが、それは同時に科学の名の下で古い偏見を合理化することをも意味した。人種概念はさらに、啓蒙時代の博物学の延長として構築されたともいわれる。前近代には人種にもとづく差異が存在せず、啓蒙時代の人類学や生物学の誕生によつてはじめて、世界諸地域に住む人々のマッピングから人種の分類へと関心が移行したと考えるのである (e.g. Mosse 1978; West 1982)。

以上のような近代起源説は、普遍説が抱える共進性をいかに説明するかという課題にすべてではないにしても有力な答えを与えてくれる。しかしながら他方、欧米の近代の人種論とは接点をもたずして、生来的で矯正が困難だと信じられる差異をもとした序列階梯が社会制度に埋め込まれている場合、それをどうみなすかという課題は、これらの説明で満たされることはない。また近代西洋起源説が人種概念として一般化して語られるにもかかわらず、それが他地域に、いついかにして拡散したかについて体系だった説明がなされているわけでもない。さらに人種概念を近代の産物と捉え、西洋の一方的な影響下で世界諸地域に広がったと主張する見方も、大きな課題を残す。諸社会で近代から形を変えながらも継承された差別との接合はなかったのだろうか。あるいは非西洋の社会は、ただそれを輸入しコピーしただけだったのだろうか。すなわち現地社会の指導者や資本家、科学者・研究者の植民者との共犯関係や、彼らが自社会のそれぞれの利害に即するように加えた変形を看過しているように思われる。人種概念を近代西洋のヘゲモニーの呪縛から解放しようとする欧米の研究者らも、みずからエスノセントリズムに陥っているとわざるをえないのである。

## 二大学説の陥穽

以上のように、人種概念の起源について、大別してふたつの対極的な見地が存在することを確認し、それらの限界やそこから透過される人種概念の課題をいくつか指摘してきた。それによって人種概念に関して二大学説とは異なる見方を模索すべき必然性が浮彫りになる。普遍説が主張するところの、古代における身体的差異をもととした偏見は地域によって認められても、時空間を超えて人間に付随すると考えられるような人種概念の普遍性の根拠は確認できない。他方、近代起源説が看過している西洋以外や近代以前の西洋でも、エスニシテイ概念には単純には回収されない、人種にもとづく差別は観察されるのではないか。つまり、満足すべき理解をわれわれはまだ与えられていないのであり、新たな見方が探究されねばならない。

ただしこれまでまったく二大学説に異が唱えられなかったわけではない。マイルズは、人種主義は前近代のヨーロッパやヨーロッパとアフリカ・イスラム社会との関係に起源をもつとして、それらが近代の植民地主義や国民国家形成においていかに再生産されたかを論じている (Miles 1989)。北米の人種関係に関する古典のひとつ、『支配する白、支配される黒』の第一章「第一印象」で、W・ジョーダン<sup>17</sup>は、一六世紀イギリス人が、南欧の人々がもったようなアフリカ人との歴史的経緯を経ず接触が突然であったがために黒い皮膚に強烈に印象づけられ、その後の北米における人種主義の素地を築いた、とする論を展開している (Jordan 1968)。しかし、これらはいずれもヨーロッパ人に主体をおいた限られた範囲の論議にすぎない。

人種主義の主体をヨーロッパ人に限定した視座を超え、同時に個々の社会的文脈における人種主義の解明に閉じることもなく、二大学説の先にもえてくるものはないだろうか。次節では、人種研究において未着手であったこの課題に向けて試論を展開することとしたい。



### 第三節 人種概念の三つの位相

本章の冒頭で、「一見異質にみえる事象をあえて同じ土俵で論じることにより、共約不可能と思えたものに通底する何かが見えてこないだろうか」と記した。本節では、これまで述べてきた問題提起を踏まえて、私なりの仮説を提示し、さまざまな専門領域の言語で語られる人種概念を包括的に理解する手掛かりを探りたい。その仮説とは、人種概念を構築する諸事象の最大公約数を抽出した場合、race、Race、RR (Race as Resistance) と呼びうる三つの位相が考えられる、というものである。<sup>18)</sup>

三つの位相のネーミングは、英語における小文字・大文字表記の意味の差異や略語の利便性ゆえに採用されているにすぎない。<sup>19)</sup>この試論は、個々の位相がそれぞれ独自の過程を経て構築されても、互いに通底し、連鎖し、ひとつの位相が異なる位相へと転化する、そのような複合的かつダイナミックな概念として人種を読み直すためのひとつの装置である。Race、Race、あるいはRRのそれぞれは、一枚岩的に存在するわけではなく、個々の位相のなかに重層性、多様性、可変性が見いだされ、さらにそれら三つの位相は人種概念というひとつの球をなすように相互に連関している。<sup>20)</sup>ここで重要になるのが、冒頭で挙げた人種概念のもつ特性である。この試論は、どのような社会的および歴史的条件が、今日なお人種の社会的リアリティを再生産させつづけているのか、という問いに究極的には向けられている。

この三つの位相という仮説は、既存の学説史との関係性からいえば、次の点において意義をもつかもされない。第一に、人種概念は決して普遍的に存在するものでも、かといって近代、西洋の産物でもない、ということ、すなわち人類

普遍ではないが、前近代にも、また西洋以外においても、少なくともいくつかの社会において存在したと主張する点、第二に、人種が支配者集団にとって差別を正当化する概念であり、つづける一方、別の位相においては、マイノリティにとつて人種差別に抗する闘争やアイデンティティ・ポリティクスのための発話と実践の位置を提供していることを、合わせて理解する視座を提供する点、第三に、ゲノム時代の今日、われわれが憂慮しなければならない現在と過去の類縁性を暗示する点、である。

#### 小文字の race

まず、当該社会で観察される社会分化した集団の差異が、世代を超えて継承され、環境によつて矯正することのできないもの（あるいは矯正が容易ではないもの）として理解され、しかもその差異が明瞭な優劣や排除をともなつて政治・経済・社会制度に表現される場合、これを便宜的に小文字の "race" と呼ぶ。誤解のないように強調しておけば、これは普遍説が唱えるような人種ではない。人間社会に時空間を超えて存在するのではなく、小文字の race は、社会成層化がある程度進行した文脈でないと発生しえない。また Race は、第一節で述べたように単にエスニック集団や偏見によつて輪郭化された他者に回収されうる概念でもない。単なる偏見が、制度化された差別をともなう race へと転化する要因としては、まずなにより労働や宗教・政治面における制度的変化が考えられる。ただしその発生時期や構築要素を特定することは、race の場合とくに困難である。集団が生成された初期は、race は地域的に偏在する場合が多く、したがつてその生成の兆候を社会全体において認めうることは稀であろう。

#### 大文字の Race

つぎに、世界中の人々のマッピングと分類を意識して構築された科学的概念として流通する人種を、大文字の "Race" と呼ぶことにする。ここで Race と大文字で表記する意図は、この概念の普遍性を示唆することにはない。科学的であると信じられるがゆえに、普遍的言語・普遍的原则として世界中の人々を標準化し分類することが可能で